

地域課題へと向かう教育者を 育てる教育心理学者の七転八起

準正課プロジェクトにおいて
学生のエージェンシーを引き出すには

藤江 康彦

(東京大学大学院教育学研究科)

yfujie@p.u-tokyo.ac.jp

企画趣旨に対して

全体的な問い

- これらの取組をあえて準正課活動として設定することの意味は？
 - 正課以上にエネルギーが求められるのではないか？
 - 課外活動としても設定可能ではないか？
- 「エージェンシー」(agency、co-agency)の意味は？
 - 正課での学習よりも学習者にかかる制約はさらに大きいのではないか？
 - プロジェクト間で共有されているか？
- 各取り組みにおいて、関与の対象の観察はしなくてよいか？
 - 学生たちはいきなり課題や人間へと投入されるのか？
 - 対象のことをよく知るための学習機会は保障されるのか？
- 準正課活動はプロジェクト以外に選択肢をもたないのか？
 - あえて目的を決めずに学生を地域に投入するケースは？
 - 探索、観察、フィールドワークなどの可能性は？
- 参加した学生の経験は個別性が高く多様であるのではないか？
 - 学生の学びの軌跡をとらえられないか（正課も含めて）？
 - 環境における資源へのアクセスの個別性や多様性をとらえられないか？

準正課活動でおこなわれていること

地域社会や自分自身の興味関心に目を向け、なんらかの実践に身を投じ、その中で自ら課題を発見し、課題解決に他者と協働で取り組むプロジェクトへの参加

- 本シンポジウムの問い

- 大学生はどのような学習環境下でプロジェクトを主導していくようになるのか

- 学習環境をとらえ、描く

- 学習環境と学生との相互作用をとらえ、描く

- その過程はどのようにモデル化していくことができるか

- 学生一人一人の学習（参加）の道筋をとらえ、描く

準正課活動の学習環境のありかた

- 「大学**だからできる**」かつ「大学**ではできない**」
 - 大学だからできる
 - おとな（教職員）の**教育者的**関与：トレーナー、メンター、ファシリテーター、コーディネーター、師匠
 - **教育的に**デザインされた環境：学習に必要な資源の布置、カリキュラムマネジメント、学習の文脈
 - カリキュラム：目標設定、知識・技能、資質・能力の転移、人材育成
 - 大学ではできない
 - おとなの**非教育者的**関与：市民として、仲間として、成員として、同僚として、上司として、師匠として
 - **社会実践的に**デザインされた環境：実践に必要な資源の布置、人員のマネジメント、実践の文脈、営利の優先、正統的周辺参加
 - 活動の組織：現実に生じている問題、現実に存在している人間（大学生としてではなくおとなとしてかわる）⇒学習のカリキュラム（Lave & Wenger, 1991、上野, 2006）

参加する大学生の視点から見たとき、実践における様々な資源やその配置、アクセスはどのようにデザインされているのか

準正課活動と正課活動、課外活動との関係

正課教育の内容の洗練に伴い、教職志望学生の主体性を育む余地が少なくなっている

- 「正課充実の陥穽」についての課題意識
 - 教職課程固有の課題であるのか？（コアカリ？）
 - 専門職教育においては主体的であることは前提ではないか？
 - そこで育まれるべきと考えられている主体性とは？
- 準正課充実化のリスクは？
 - 教職員側の負担増
 - 社会的、制度的、文化的、地政学的制約が生じさせる困難
 - 正課＋準正課による課外活動の圧迫
- 準正課と正課、課外の往還ということはないのか？
 - 準正課が正課、課外をどう充実させていくか
 - 大学教育（生活）トータルで学生が発達していくという視点
 - 準正課、正課、課外といった空間軸での生態学的検討

各報告に対して

野中先生

- 対象：正課外で子どもとの関わりを求める学生
- 学習環境：大学だからできることを最大限
 - 学習に必要な資源の提供（子どもの特性、教材候補）
 - 学習を意識化させるの文脈の保障（リフレクション）
 - コースワークの明確化とマネジメント
- 質問
 - 大学側の設定によるリフレクションの充実
 - 実践報告書や活動動画の編集において、学生はなにを省察し、自己探究しているのか？
 - オンラインによる相互閲覧ということが、どのような相互作用を生み、学習を支えているのか？

三和先生

- 対象：「何かしたい層」の学生（何かやりたいが何をするか決まらず行動していない）
- 学習環境：教員による場の設置＋学生による活動デザイン
 - －（これまで）教員の研究への参画：研究の一環としての子ども支援
 - － 教員がテーマを設定して、学生主体で取り組む⇒きっかけを与える
 - － 学生による協働、マネジメントによる進行（運営は学生のみ）：対立、葛藤、阻害等も起こりやすい？
- 質問：信大マイクラ
 - － 参加の障壁になること（活動が続かない）について
 - 「できる」感覚の低さ：「期待」が十分とはいえない／「有能さの欲求」が十分とはいえない
 - それ以外の可能性は？
 - － 学生集団のありかた（例：A氏のリーダーシップ）
 - － マインクラフトというゲームの特性（ICT全般）：
 - » 手続き、ツール使用スキルの欠如による活動の本質へのアクセス不能状態
 - 継続を前提とするほうがよいのか？

富田先生

- 対象：ゼミ生？
- 学習環境：学校的組織においておとなとの関わりの多様なチャネル
 - 学生が自分たちで意思決定（教員：安全面、サポート）
 - おとなとの関係の多様性
 - 教員と横並びの関係（プロジェクトメンバーとして）
 - 教員もプロジェクトを立ち上げる（モデリング？）
 - 外部資金によるスタッフの存在
 - 学生と子どもとの関係性も同様
- 質問
 - 学年間の引き継ぎなど、年度を超えた継続を支えているものはなにか？
 - ALACTモデルの適用をめぐって
 - 省察の過程を示しているが、学生がプロジェクトを主導していく過程との関係は？
 - 本報告でALACTプロセスが示すものの意味はなにか？